

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（心理学）	氏名	池田 龍也
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目			
非外傷性イベントと解離性体験に関する臨床心理学的研究			
論文審査担当者			
主査教授 岡本 祐子			
審査委員 教授 中條 和光			
審査委員 教授 杉村 和美			
〔論文審査の要旨〕			
<p>解離とは、記憶・意識・アイデンティティ等を統合する能力が一時的に失われた精神状態を示す。解離は、Janet(1889)によって発見されて以来、外傷体験が原因であると考えられ、この解離生起メカニズムは「外傷モデル」と呼ばれてきた。しかしながら19世紀から20世紀半ばに比べて今日では、解離性体験は臨床事例のみならず、日常的にもかなり報告されるようになっている。本論文は、外傷モデルを再考し、外傷性の乏しいネガティブなライフイベントである非外傷性イベントも解離を引き起こす要因であると仮定して、解離の生起要因を出来事要因および個人要因の2側面から検証したものである。本論文は、以下の5章から構成されている。</p> <p>第1章「本研究の背景と目的」は、第1節「解離に関する研究の動向」、第2節「出来事と解離を繋ぐ個人要因」、第3節「解離を引き起こす出来事要因」、第4節「本研究の目的」からなる。第1節では、本研究の背景である解離に関する研究の動向を展望し、解離を論じるためには外傷性のような出来事の属性（出来事要因）に加え、当事者の物事の捉え方（個人要因）にも注目する必要があることを述べた。第2節では、出来事と解離を繋ぐ個人要因に関する研究、第3節では、解離を引き起こす出来事要因の研究を展望し、先行研究の主要な問題点として、大多数の研究が外傷モデルに依拠しており、非外傷性イベントの影響および個人要因が十分に考慮されていないことを指摘した。第4節では、外傷モデルでは説明が困難な非外傷性イベントによって引き起こされる解離の関連要因を出来事要因と個人要因の2側面、つまり①出来事と解離の関連の程度、②出来事と解離を繋ぐ個人要因、③解離を引き起こす出来事要因を検討するという本研究の目的を述べた。</p> <p>第2章「外傷性/非外傷性イベントと解離の関連の再考」は、第1節「出来事と解離の関連性の再考(研究 1-1)」、第2節「解離を引き起こす出来事の再考(研究 1-2)」からなる。これまで対象者が少ないため除外されてきた事例研究論文等も含めて、新たにデータベース検索を実施し、出来事と解離の関連を再検討した。また解離と関連しやすい出来事とその関連の程度を分析した。その結果、これまで解離を生起させるとされてきた性的虐待や幼少期の外傷体験等の特定の出来事ばかりでなく、多くの生起要因があることが見出された。</p>			

第3章「出来事と解離を繋ぐ要因としての個人要因」は、第1節「被受容感が解離に及ぼす影響(研究2)」, 第2節「被害的認知が解離に及ぼす影響(研究3)」からなる。第1節では、大学生を対象に、非外傷性イベント、被受容感と解離の関連を検討した。その結果、被受容感の乏しきは解離のリスク要因となることが示された。第2節では、大学生を対象に、被害的認知が解離に及ぼす影響を検討した。その結果、被害的認知の繰り返しが解離を引き起こすことが示唆され、当事者がその出来事をどのように体験しているのかという主観的視点の重要性が認められた。

第4章「解離を引き起こす出来事要因と解離体験者の心的世界の特徴」は、第1節「出来事の属性が解離に及ぼす影響(研究4)」, 第2節「解離体験者の心的世界の特徴に関する探索的検討(研究5)」からなる。第1節では、大学生を対象に、外傷性の有無に関わらず、継続的にストレスに曝されること(以下、継続性)が解離に及ぼす影響を検討した。その結果、継続性よりも外傷性の方が解離を引き起こしやすいものの、非外傷性イベントの継続や蓄積により解離が生じ得ることが示唆された。第2節では、出来事および自己に対する認知と解離の関連性を質的に検討した。研究4において面接調査に同意した者のうち、解離傾向上位の11名を対象に面接調査を行った。その結果、①原因帰属や統制感という個人の認知が解離と関連する可能性、②解離を引き起こすような出来事の属性は、外傷モデルで指摘されていた身体的脅威性の強さに必ずしも限定されないことが示唆された。

第5章「総合考察」では、第1節「本研究の成果」、第2節「本研究の限界および今後の課題」について述べた。

本論文は、現代における解離に着目し、非外傷性イベントと解離性体験に関する臨床心理学的研究として、次の4点において高く評価することができる。

- 1) 現代の解離は、従来の「外傷モデル」が指摘してきた外傷的出来事と解離の単純な因果関係では十分に説明できないことを実証的に示し、出来事と解離の間に「解離を生起させやすい個人要因」が介在するという新たな生起モデルを提出した。
- 2) 外傷の有無にかかわらず、継続的にストレスに曝されることなど、「非外傷性イベント」も解離の生起要因であることを実証的に示した。
- 3) 「解離を生起させやすい個人要因」として、被受容感の乏しさと繰り返される被害的認知があることを実証的に示した。
- 4) 外傷性イベントによって生じる解離と非外傷性イベントによって生じる解離では、出来事要因と個人要因の持つ重み付けが異なることを示した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(心理学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成29年2月7日